

幕末明治の写真師列伝 第十三回 下岡蓮杖 その十二

久之助は江戸から横浜に帰る際に、江戸の風景を撮影したいと考えていたが、当時はまだ江戸にいる過激な尊王攘夷の浪士たちも多く、道端でカメラを設置して撮影などをしていたら、危害にあう恐れもあるため、そこで仕方なく道の途中で籠を止め、休憩する風を装って、籠の御簾の間からレンズを出して、密かに江戸城や江戸市街の風景写真を撮影することにした。撮影した写真は十四から十五種類であったが、それらをすぐに複写、販売するわけにもいかず、しばらくは自宅に隠して、後にこれらの写真を販売することにした。するとこれらの写真は外国人によく売れて、久之助は大儲けすることになる。それはともかく、久之助が江戸から横浜戸部の棟割り長屋に帰るこの当時は、まだまだ久之助の窮乏の日々は続く。

そんなある日のこと思いがけないことがあった。というのも安政3年から6年までの間に久之助が下田奉行所の下番役に就いていた頃の特別手当清算分の扶持米売得金が渡されてきたのである。その金を元手に久之助は写真に必要な薬品も買い揃え、横浜の野毛に一戸を借りて、引っ越しをすることにして、この野毛の地にて初めて営業写真館を開業することとなった。それは文久元年（1861）の暮れから2（1862）年の春頃のことであった。この時の逸話としては、野毛に床店を借り、近所の農家の庭も借りて写真場にしたといわれている。

この野毛の営業写真館に横浜在住のアメリカ人や中国人が客として来るようになり、久之助はさらに横浜市内の弁天通に移転すること



下岡蓮杖写真館（明治初年）

を決心する。そこで衣類や器具を売って四両二分の資金を作り、そのうちの三両を一月分の家賃として先に納めて、一両一分余りで移転の際の諸費用、諸雑費とした。そのため残金はわずかに一分二朱しか残らなかった。これでは新たに写真場も借りることができない。そこで客があるごとに近隣の土間を借りて写真撮影することにして、その傍ら東都錦絵も外人向けのお土産として販売し、自らも油絵を画いてその絵を売ることにして、とにかく資金を蓄えることにした。こうしてようやく二十五両の金を蓄えることもできて、久之助は家屋も修理して、写真場も新たに造ることができた。この時の弁天通の家はちょうど崖の中腹に建てられており、その物干場が崖上の高さと同じだったため、写真場はこの物干場を改装して造り、西洋の外国語で看板も掲げて開業した。こうしてこの弁天通の営業写真館には外国人客が大勢来ることにもなり、久之助はわずか一ヶ月で二百五十両の借財を返却することもできたのだった。

（森重和雄）